九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Neurodevelopmental Outcomes of High-Risk Preterm Infants A Prospective Study in Japan

鳥尾, 倫子

https://hdl.handle.net/2324/4772316

出版情報：Kyushu University, 2021, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

KYUSHU UNIVERSITY

氏　名：　鳥尾　倫子

論文名：　Neurodevelopmental Outcomes of High-Risk Preterm Infants
A Prospective Study in Japan

（ハイリスク早産児の神経発達予後:日本における前向き研究）

区　分：　乙

論　文　内　容　の　要　旨

【目的】極低出生体重児（Very-low-birth-weight infants; VLBWIs、出生体重 <1,500 g）を9年間フォローアップし、神経発達の予後を明らかにする。
【方法】2003年から2009年に九州大学病院で出生した224人のVLBWIsを登録し、前向きに追跡した。知的発達症、てんかん、および自閉症スペクトラム症（Autism spectrum disorder, ASD）または注意欠如・多動症（Attention-deficit hyperactivity disorder, ADHD） の合併の有無について、3歳、6歳および9歳で評価した。
【結果】3歳まで185人（83%）、6歳まで150人（67%）および9歳まで119人（53%）の神経発達プロファイルを追跡できた。9歳時の合併症は、知的発達症（IQ <70）25人（21%）、てんかん11人（9%）、およびASD/ADHD 14人（12%）であった。IQ <70群は、IQ ≥70群よりも高い頻度でてんかんを合併した（各44% vs. 0%）。これとは対照的に、ASD/ADHDの合併率はIQ <70群とIQ ≥70群間で同等であった（16% vs. 11%）。既知の周産期合併症と磁気共鳴画像での重度脳病変は、知的発達症およびてんかんに共通するリスクと考えられたが、ASD/ADHDのリスクではなかった。男児であることは、ASD/ADHDに独自の発症リスクであった。
【結論】VLBWIsは一般小児よりも、9歳時の知的発達症、てんかんおよびASD/ADHDの有病率が高い。ASD/ADHDの発症には、知的発達症およびてんかんとは異なるメカニズムが関与する可能性が示唆された。